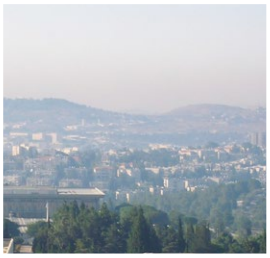
月刊みんぱく

2023年
8月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和5年8月1日発行 第47巻第8号通巻第551号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology



特集

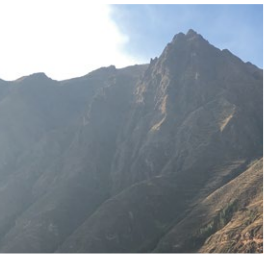
政治的なるものと不条理の超克

独裁体制下で生きる技術　新免 光比呂

ロックダウンでよみがえる配給制時代の市民の知恵　劉 征宇

アンデスにおける先住民の集住化とその帰結　齋藤 晃

傷ついた「民主主義」の誇り　菅瀬 晶子



月刊みんぱく
2023年
8月号

目次

1 エッセイ　千字文
「これが、あのパルミラ……」
小松 由佳

特集
政治的なるものと不条理の超克

2 独裁体制下で生きる技術
新免 光比呂

4 ロックダウンでよみがえる配給制時代の市民の知恵
劉 征宇

6 アンデスにおける先住民の集住化とその帰結
齋藤 晃

8 傷ついた「民主主義」の誇り
菅瀬 晶子

10 みんぱく回遊
「ユニバーサル・ミュージアム」からの触発
広瀬 浩二郎

12 みんぱくインフォメーション

14 ○○してみました世界のフィールド
双子のクレーンが見下ろす町
酒井 朋子

16 コレクションあれこれ
大阪万博アメリカ館のティピーの行方
伊藤 敦規

18 シネ倶楽部 M
大統領はコメディアン
――「国民の僕」
赤尾 光春

20 ことばの迷い道
ドマリ語、教えようか？
北村 萌

21 編集後記・次号の予告

表紙
写真：新免光比呂、劉征宇、齋藤晃、菅瀬晶子、Wikimedia Commons

エッセイ 千字文

「これが、あのパルミラ……」

小松 由佳

二〇二二年九月、一一年ぶりに目にしたシリア中部のオアシス都市パルミラ。廃墟と化した街で、私は立ち尽くした。

パルミラはシリア砂漠の中央部に位置し、古代から東西を結ぶ交易の要衝として栄えてきた。かつての人口は約一〇万人。郊外には世界遺産パルミラ遺跡が残され、一大観光地として賑わった。

街の郊外でラクダの放牧を手がける大家族に出会い、砂漠の暮らしを見せてもらったのは二〇〇八年のことだ。やがて一家が暮らしを奪われ、難民となっていく姿を目の当たりにし、難民の取材を始めた。現在では、トルコ南部を主な取材地として足繁く通っている。

写真家として、シリア難民と向き合って感じる異質さがある。人々は難民となってシリアから離れてもなお、シリア政府に精神的支配を受けている。政治に関することはもちろん、歴史や故郷での記憶ですら、人々は語ることを躊躇する。言葉や写真をどこかに残すことで、いつか身の危険に繋がるのではと恐れるからだ。それは長い時間をかけ、シリアでの政治体制が人々の心の奥深くに植え付けてきたものだ。

六〇年近い独裁体制が続いてきたシリアでは、自由な政治参加を許されず、体制に異を唱える者は徹底的に弾圧され、口を封じられた。二〇一一年初めには「アラブの春」が波及し、市民による民主化の気運が高まったが、政府は武力でこれを弾圧。武力衝突が広がり、国内は内戦状態へと陥った。現在までかつての人口二二四〇万人中、六七〇万人ほどが国外に逃れて難民となった。

パルミラでも二〇一五年から一七年にかけ、IS（イスラム国）と政府軍との間で激しい戦闘と占領とが繰り返され、シリア政府軍とロシア軍による空爆で、市街地のほとんどが壊滅した。それぞれの占領下、敵への協力者が数百人規模で処刑されたため、人々は政治的立場を明確にする必要に迫られた。そうして残ったのが、現在のパルミラの住人五〇〇人ほどだ。全員が政府支持者とされる。

「街の破壊者はISだ。政府軍じゃない」。「ここでは何も起きていない」。目を疑うほどの廃墟の中で、住人たちは全く真逆のことを口にする。

人々は嘘をついているのではなく、「あえて真実を語らない」。いや「語れない」のだ。それが、このシリアを生きねばならない彼らからの、見えないメッセージなのだ。真実は、そこに生きる者の視点によって形を変える。そして何より、人々はここで命を永らえなければならないのだ。かつて「楽園」と謳われたパルミラの街で、人々はその状況を肯定し続けることで生きようとしていた。

プロフィール
ドキュメンタリーフォトグラファー。秋田県生まれ。2006年、世界第2の高峰K2(8611メートル)登頂。2012年からシリア内戦・難民を取材。主にトルコ南部のシリア難民コミュニティを継続して訪問。著書に『人間の土地へ』（集英社インターナショナル）など。第8回山本美香記念国際ジャーナリスト賞受賞。
公式ホームページは「YUKA KOMATSU」 https://yukakomatsu.jp

特集

政治的なるものと不条理の超克

社会主義イデオロギーに彩られた独裁国家、キリスト教に支えられた植民地国家、危機にある民主主義国家、大規模な管理統制社会。個人を超えた政治なるものは、不条理として人びとの前に立ちあらわれる。
人びとはいかにして不条理を生き抜いてきたのだろうか。

チャウシェスク大統領の独裁を終わらせた民主革命で倒れた女性を悼む十字架（ブカレスト、2007年）

独裁体制下で生きる技術

新免 光比呂（しんめん みつひろ）　民博 教授

熱狂的拍手と夜の闇

私事となるが、わたしの父はシベリア抑留兵である。収容所での飢餓と重労働の過酷な体験を語ってくれたが、わたしには生き抜いた父のことがわからなかった。自分なら早く死んでらくになりたかっただろう。

長じて悲惨な現実に向き合うはめになった。チャウシェスク独裁体制下におけるルーマニア調査での経験である。

モノを求める長い行列、役人たちの無表情で高圧的な姿、こっそりと語られる不満や絶望、テレビで繰り返し放映される大統領の演説と熱狂的な拍手、そして夜の闇に消されていく人びと。このチャウシェスク独裁体制は一九六五年から一九八九年まで続いた。

西側世界に秋波を送ったチャウシェスクだが、その高度経済成長の目論見（もくろみ）は破綻し、膨大な対外債務が残った。債務を返済するために飢餓輸出ともいわれた小麦輸出をおこなった。人びとは飢餓に苦しみ、配給を受けるためにならんだ。電力は制限され冷たいシャワーと凍えるような寒さの部屋で震えた。秘密警察セクリターテは密告を奨励して人びとの不満を抑えた。子どもたちは学校で親の会話を先生に報告した。それでも人びとは生きてきた。彼らの生を支えると同時に支配していたのは、永遠の生を保証する信仰だろうか、西側から漏れ伝わる自由の息吹だろうか。人の心のなかを推し量るのは難しいが、外面的に見れば、人びとの暮らしを実質的に支えていたのは縁故主義（ネポティズム）、裏取引、闇経済ではないか。

縁故主義がもたらすもの

縁故主義は、少数の人びとが大きな権力を維持し、その力を家族や親しい人びとへ配分し、引き継がせようとするしくみだ。現代日本に生きる我々にもなじみ深い。ルーマニアでは国家の上層部から地方の工場や農場にいたるまで、十分な身元の保証と確かな政治的信頼性をもつ人びとだけが利益を得られた。したがって、効果的な人間関係（いわゆるコネ）を構築することが、職場での配置改善、さまざまな制限の緩和、報奨金の獲得の手段になった。

縁故主義が促進したのがコネを利用する裏取引である。国家レベルでの経済計画、必要な資材・労働力の確保にすら影響し、国家レベルで（少なくとも書類上は）目標を達成していても、地方レベルでは裏取引が横行し、生産実態は惨憺（さんたん）たるものだった。半面、現場での集団と個人が差配する力をもつようになり、これがある種の自律性を生むことにもなった。

そして闇経済だ。国家が公的経済に物資を提供できないので、人びとは必要を充足するために公式の数字にはあらわれない生産と交換へ向かった。ドルの闇レートはいうにおよばず、生産工場からの横流しは日常茶飯事だった。

生きる知恵か、不正の温床か

これが強大すぎる国家権力の支配のもとで、人びとが意識的に、無意識的に選び取った生きるための手段である。こんな状況の下で、正しく生きるなどということばは絵空事だろう。しかし、調査で出会った人びとのなかには節を曲げない姿も確かにあった。

ルーマニアの一部の地域では、「シュメッケリ」という狡（ずる）さを称賛することばがあるという。状況を抜け目なく利用して生きることをさす。こうした生きる技術は、管理体制の網の目を潜（くぐ）り抜けようとする個人の実践には有効であろう。しかし、社会全体となると、人びとの社会的差違を拡大し、経済的な機会主義をもたらし、政治的連帯の弱体化を促進する恐れはないだろうか。

3000を超える部屋があるという国民の館（通称）。チャウシェスクの野望の遺産だが、現在は国会議事堂となっている（ブカレスト、2009年）

下：古書の夜店で熱心に本を探す人びと（ブカレスト、1986年）
左：2カ月先の民主革命など予想もできない地方都市の路上（シビウ、1989年）

ロックダウンでよみがえる配給制時代の市民の知恵

劉（りゅう） 征宇（せいう）　民博 外来研究員

住民の陰性証明を確認する団地の警備員（天津市、2022年）

「万全」の隔離準備

二〇二〇年に始まった新型コロナウイルス感染症の世界的流行に対して、中国は感染症の完全な封じ込めをはかるため、地域の封鎖、PCR検査の徹底、感染者や濃厚接触者の強制隔離などを実施して、厳しく対応した。以下は、二〇二二年二月から五月にかけてわたしが天津（てんしん）市の実家で体験した、ロックダウン生活のリアルな記録である。

当時、入国後の隔離措置では、二週間のホテル隔離と一週間の自宅隔離が必要であった。そのため、わたしは日本を出発する前、SNSでの個人投稿の記事を閲覧し、政府指定の隔離ホテルのクチコミや入国手続きの流れに関する情報を多く収集した。さらに、実家の団地の行政上の担当者「網格員（ワンゲユアン）」とWeChatで連絡を取り合い、出発地や到着日時、人数、滞在期間などを報告し、地元の最新の防疫政策を確認した。このような「万全」の準備のおかげで、ホテルでの集中隔離は無事に終わった。

世帯ごとに配られる外出通行証（天津市発行、2022年）。
裏面には、外出は2日に1度、世帯ごとに1名のみ可能で、買い物は指定された店舗でおこなうようにと書かれている

さまざまな行動制限

自宅での隔離期間は定年退職した両親とともに過ごした。期間中は全員の外出が禁止されるため、両親は食料品と日用品を買いだめし、一週間分の生活必需品を事前に準備した。ところが、父が赴いた市場で感染者が出たことがわかり、その追跡記録から父は網格員に接触者として判断され、わが家の隔離期間は一週間延長された。幸いなことにデリバリーの利用や隣人からの助けがあって、わたしたちはこの隔離延長を乗り切ることができた。

天津到着後一カ月を経て、わたしはやっと外出することができた。ただし、団地を出入りする際や諸施設に入るときはおおむね、マスクはもちろん、健康状態を示すデジタル証明書の提示が必要であった。同時に、行動履歴を残すため、利用施設のQRコードをスキャンすることも求められた。さらに、政府が公表する感染者の行動履歴を常に確認し、感染リスクの高い場所を避けるようにしなければならなかった。

また、ロックダウン中の市内の感染拡大を抑えるため、政府は地域を指定し、全住民を対象としたPCR検査をおこなうこともあった。住民たちは検査の陰性証明が出るまでは、出勤や買い物などの外出ができなかった。そのため、わが家では、両親は網格員からの検査案内を確認しながら、事前に買いだめをしたりネット通販を用いることで、団地封鎖中の食料確保に努めた。

これらの行動制限にやっと慣れてきたころに、わたしの三カ月間のロックダウン生活が終わった。

団地の敷地内でPCR検査を待つ人びと（天津市、2022年）

食料品の備蓄（天津市、2022年）

買いだめ、助け合い、保存食

二〇二二年の年末から、中国政府はゼロコロナ政策を見直し、厳格な行動制限を緩和していった。この二年間のロックダウン生活において、人びとは必需品の買いだめ・まとめ買いや隣人との助け合いなど、多様な手段を用いて、臨機応変に対応していた。これらの手段には、通販アプリの利用というデジタル時代におけるあらたなツールだけでなく、かつての配給制の時代（一九五三～一九九三年）における食料品確保の知恵も見られる。

例えば、配給制のもとでは食料品は決まった量しか購入できないため、人びとは密（ひそ）かに購入証を借用したり、配給券を交換したり、また野菜を買いだめして乾物や漬物を作ったりして、日常の食料不足を補った。

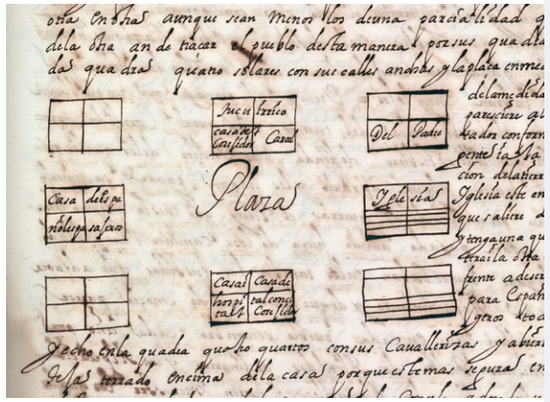
それに対して、コロナ禍におけるロックダウンでは、団地封鎖の知らせが届くと、みな肉類や卵、牛乳などの生鮮食品を多めに購入して、冷蔵庫に詰め込んだ。さらに、野菜を長持ちさせるため、ゆでてから冷凍したり、漬物を作ったり、あるいは新聞紙に包んで日陰で保存するなどの工夫を加えた。また、近隣住民間では嗜（こうひん）好品や栄養食品の物々交換もおこなわれた。特に、WeChatでの近隣住民グループの投稿には、調味料や即席麺、缶詰、おやつ、コカ・コーラを求める若者の姿がよく見られた。

このように、かつて配給制の時代に培われた食料品確保の知恵は、ロックダウン下の人びとにも活用され、さらに次の世代にも引き継がれていくのである。

配給制時代の食料品の購入証（天津市発行、1970年代）。
手帳形式のもので、世帯ごとに配られる。裏面には世帯の構成や住所、購入できる食料品の種類と数量が明記されていた

アンデスにおける先住民の集住化とその帰結

齋藤 晃（さいとう あきら）　民博 教授



16世紀後半のスペイン人官僚の建白書に描かれた
レドゥクシオンの概念図
出典：Juan de Matienzo, "Gobierno del Perú" (1567)
所蔵：ニューヨーク公共図書館

スペイン人によるレドゥクシオン建設

ペルーやボリビアの農村部を旅していると、町や村の多くがキリスト教聖堂と広場を中心とした碁盤目状の区画を備えていることに気づかされる。この整然としたレイアウトは、一六世紀にインカ帝国を征服し、アンデス地域を支配下に置いたスペイン人が広めたものである。征服者たちは小さな集落に散らばって暮らす先住民を自力で社会を建設できない「野蛮人」とみなし、彼らを強制的に社会生活に導こうとした。すなわち、レドゥクシオンとよばれる碁盤目状の町を建設し、大勢の先住民をそこに集めて住まわせようとした。

集住化とよばれるこの政策は、征服当初から散発的に実施されたが、一五七〇年代に第五代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドにより最重要課題に位置づけられ、アンデス全土で断行された。トレドの政策は、「野蛮人」の教化というイデオロギーに支えられながらも、租税の徴収や賦役労働者の徴発、キリスト教の宣教を促進させるという実際的な効果も狙っていた。

集住化は失敗したのか？

住み慣れた居住環境を激変させるこの政策に、先住民はどう対処したのだろうか。初期の研究では、彼らは征服者から押しつけられた異質な外観の町に住むことを好まず、住み慣れた旧来の集落に舞い戻った、と唱えられた。実際、第九代ペルー副王ルイス・デ・ベラスコは、レドゥクシオンに集められた先住民の多くが死亡するか逃亡するかしたため、トレドが造った町は荒廃してしまった、と嘆いている。

しかし、集住政策が失敗に終わったというこの説は、レドゥクシオンの多くが今でも残っている、という事実により否定される。実際、筆者の研究チームの計算によれば、史料に記載された八八一の町のうち、七割以上が現存している。それゆえ、初期の研究者が唱えた集住化失敗説を額面どおりに受けとることはできない。

もっとも、レドゥクシオンに集められた先住民の多くが旧集落に戻ってしまったことについては、たしかな史料上の根拠がある。トレドが造った町はしばしば農地や牧場から離れていたため、先住民は生業上の必要性に訴えて、植民地当局から旧集落への帰還の許可を勝ち得ているのである。

初期の研究者はこのような帰還を集住化への先住民の抵抗の証（あかし）とみなした。帰還の理由とされた生業上の必要性は口実にすぎず、真の目的はスペイン人の官僚や司祭の統制から逃れ、彼らの目の届かない旧集落で在来の神々を崇拝し続けることだった、というわけである。

たしかに、当時のカトリック教会が実施した在来宗教の根絶活動の記録からは、旧集落が「偶像崇拝」の温床となっていた事実が浮かび上がる。しかし、記録を丹念に読めば、別の側面も見えてくる。在来宗教の要素がたぶんに入り交じっているとはいえ、旧集落の先住民は彼らなりにキリスト教を実践しているのである。すなわち、守護聖人を定め、礼拝堂を建設し、信徒会を立ち上げ、祭礼を執行している。それだけでなく、司教に請願し、教区司祭が彼らの集落を訪れて礼拝堂でミサを挙げることすら求めている。

17世紀初めの年代記に描かれた先住民の信徒会会員
出典：Felipe Guaman Poma de Ayala, "El primer nueva corónica y buen gobierno" (1615/1616)
所蔵：デンマーク王立図書館

自立と自治を求めて

旧集落の先住民は、宗教だけでなく政治の面でも、自立的な共同体の構築を目指していた。すなわち、カビルドとよばれる住民主体の自治組織を立ち上げ、レドゥクシオンに居を構える在来の首長の政治的干渉に対抗し、住民自身の利益を守ろうとしたのである。

重要なのは、信徒会にせよ、カビルドにせよ、旧集落の再建に利用された制度が、いずれも集住政策そのものによって先住民社会にもち込まれた、という事実である。レドゥクシオンは先住民を囲い込み、彼らの生産物と労働力を搾取し、彼らを征服者の宗教に改宗させるための装置だった。しかし、それと同時に、信徒会やカビルドの組織化を通じて、先住民に自立と自治の合法的な機会を提供したのである。

征服者から提供されたこの機会を先住民が逃さなかったことは、植民地時代末期の動乱の際、アンデスの多くの地域で彼らが自分たちを搾取するスペイン人の官僚と在来の首長をともに排除し、自治政府を立ち上げたことから明らかである。皮肉なことに、この民衆革命の種をまいたのは、一六世紀の副王トレドの強権的政策だったのである。

ペルー、クスコ県のピサクの町（2016年）

傷ついた「民主主義」の誇り

菅瀬 晶子
民博 准教授

「民主主義の危機」

民主主義が危機にさらされていると、今大きく揺れている国がある。「中東唯一の民主主義国家」を自認する、イスラエルである。

ことの起こりは、二〇二二年末に発足したネタニヤフ政権が打ち出した、司法制度改革である。これは最高裁の判決を国会の過半数の賛成で無効化できるというもので、すでに政権発足当初から三権分立を崩壊させ、イスラエルの民主主義を危機にさらすものだと、物議をかもしてきた。テルアビブなどの都市では、司法改革に対する賛成、反対両陣営による大小さまざまな規模のデモが毎週末に展開され、週を追うごとにその規模は膨れ上がっていった。

三月下旬、改革を公然と批判していたガラント国防相が解任されると、国民の反発は最高潮に達した。労働組合を束ねるヒスタドルートが大規模なストを決行し、企業や大学のみならず空港まで閉鎖され、イスラエルは大混乱に陥った。街にはネタニヤフ首相を「独裁者」と揶揄する落書きが溢れ、結局首相は改革の一カ月延期を決め、ストは解除されたが、毎週末の大規模な抗議デモは続行中だ。さらにこの混乱のなか、極右宗教政党の党首の要求を飲み、軍や警察とは別のあらたな「治安部隊」の創設を閣議決定してしまったことが、ファシズムへの第一歩ではないかと批判を浴びている。

手加減は無用

ネタニヤフ首相が最高裁の権限を制限することに拘泥する理由、それは彼自身に長らくかかっている汚職疑惑にある。通算一五年もの長きに亘って、イスラエル政界の「王」であり続けた彼は二〇一九年に起訴されたが、これによりイスラエルの政局は大きく混乱する。わずか三年間に五回も総選挙がおこなわれ、連立政権は次々と短命に終わり、結局二〇二二年秋の選挙でネタニヤフの首相返り咲きが決まった。その途端に発表された司法改革は、汚職疑惑裁判の訴追を逃れるためと受け取られても、致し方ない。

第二に挙げられるのが、彼が連立政権を組んでいる、極右宗教政党の意向である。ユダヤ教超正統派政党と宗教シオニストの政党があり、前者はユダヤ教の価値観の世俗派ユダヤ人市民への適用、後者はユダヤ人入植地の拡大によるヨルダン川西岸地区の併合や、国内のアラブ人排斥を公然と訴えている。そんな彼らにとって、しばしば入植地拡大に異を唱える最高裁は、煙たい存在である。司法改革を機に最高裁の権限をそぎ、判事の人事にも介入しようという思惑が透けて見える。

このような現状に対して、ヘブライ大学のフランシス・ラダイ名誉教授は、左派高級紙のハアレツに、舌鋒鋭い論説を寄稿している。超正統派に特権を与え、宗教的価値観のもと女性やLGBTQへの差別を助長し、汚職政治家への訴追を防ぐために司法の権限をそぎ、西岸を非人道的に征服しようとするネタニヤフに対して、抗議の手加減など無用であると。「民主主義の危機」の旗印のもと、抗議デモに参加するイスラエル市民たちの焦燥感が、ここにまさに集約されている。

いびつな国

イスラエルはいびつな国だ。ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害からのアジールとして、一九四八年に建国されたユダヤ人国家であるが、実際にはパレスチナのアラブ人から土地を奪うという暴力行為によって成立した。イスラエルの人口の約二割をアラブ人が占め、彼らにも市民権を与えたが、実際には彼らは二級市民とされ、ユダヤ人のなかにもヨーロッパ系と中東系のあいだには厳然たる格差がある。すべての国民が共有できるアイデンティティが存在しないこの国で、「中東唯一の民主主義国家」は、誰もが共有できるたったひとつの誇りであった。それが傷つけられたことに対する、国民の怒りは大きい。

しかしながら、この混乱は国民のあいだにいくつも存在する分断の深さを、あらためて浮き彫りにもした。それは所属するコミュニティ内にとどまり、他者に対して目を塞ぎがちなイスラエルの人びとが、日ごろ目を背けているものでもある。司法制度改革の今後はいまだ不透明だが、より境界を越えた視野を、あの国の人びとがもつことを祈らずにいられない。

司法改革反対デモの様子。プラカードに「ビビはわたしの王ではない」とあるが、ビビとはネタニヤフの愛称。このデモは、英国チャールズ3世の戴冠式の直前におこなわれた（テルアビブ、2023年、提供：AFP=時事）

イスラエルの最高裁判所（2006年、Wikimedia Commons）

右頁：ガリラヤ地方のアラブ人のクフル・ビルアム村の教会。イスラエル建国時、村民たちは村から追放されたが、イスラエル最高裁は彼らの帰還権を認めた。これはイスラエル最高裁の公平性を物語る事例である。しかしその直後の1953年、イスラエル軍が村を破壊した。教会のみは再建が許され、元村民がたまに使用している（2010年）

みんぱく回遊

「ユニバーサル・ミュージアム」からの触発

広瀬浩二郎（ひろせ こうじろう）　民博 教授

コロナ禍での「さわる」展示

二〇二一年の秋、コロナ禍の真っただなかで特別展「ユニバーサル・ミュージアム――さわる！〝触〟の大博覧会」が開催された。各方面で「非接触」が強調される状況下、あえてさわることの大切さを訴える特別展を実施した意義は大きい。二〇二三年の春以降、「ユニバーサル・ミュージアム」の巡回展が各地で開かれている。コロナ禍が収束から終息に向かう今、たくさんの人に〝触〟の可能性を実感してもらえるのは嬉しい。

特別展「ユニバーサル・ミュージアム」では、民博所蔵資料の出展はなく、さわることを前提に制作された多彩なアート作品が会場に並んだ。館の収蔵資料を使わない巡回展はめずらしいが、「ユニバーサル・ミュージアム」という概念は民博で生まれたものである。展示物との触れ合いを通じて、「ユニバーサル・ミュージアム」というあらたな考え方に親しみ、共感する。そんな巡回展があってもいいだろう。

民博の「さわる展示」は、いわゆるハンズオンとは一線を画する。「ユニバーサル・ミュージアム」展では、単に手でさわるのみでなく、全身の触覚を刺激する仕掛けが工夫されている。特別展では「音にさわる」「風景にさわる」などのセクションを設け、身体感覚への気づきを促した。博物館の展示は見ること、見せることを前提に発展してきた。「ユニバーサル・ミュージアム」展では視覚優位の常識を問い直すため、モノの迫力を体感できる空間配置に心がけている。

モノに優しく、「さわるマナー」

民博の本館展示の基本コンセプトは「露出展示」である。ガラスケースは極力置かず、モノの魅力を間近で味わってもらうのが民博の伝統といえる。結果として、民博で展示される多くの資料には、手を伸ばせばさわることができる。資料保存の観点から、展示物に積極的にさわることを奨励するのは難しい。「ユニバーサル・ミュージアム」展でも出展作品の汚損・破損が多発し、そのメンテナンスが大きな課題となっている。とはいえ、自由にさわることができる民博の柔軟性と寛容さは、これからも堅持していきたい。

「さわってもいい」を「ぜひさわってほしい」に変換していくためには、「さわるマナー」の定着が不可欠である。清潔な手で優しく丁寧にさわる。来館者と博物館がこのシンプルな原則を共有できれば、汚損・破損事故は激減するだろう。では、なぜ「優しく丁寧に」さわらなければならないのか。民博の展示物は世界各国・地域の人びとが創り、使い、伝えてきたものである。多くの場合、創・使・伝は人間の手を介してなされる。民博の資料にさわるとは、創・使・伝を追体験する行為ともいえる。多種多様なモノの背後には、それを創り、使い、伝えてきた人がいる。目に見えない人の存在をどうやって、どれだけ想像できるのかが「さわる展示」のポイントである。

「ユニバーサル・ミュージアム」に出展されるアート作品は、作家が制作したものなので、比較的容易に「人」を意識できる。子どもたちが乱暴に展示物を扱っていたら、「これを一生懸命に作った人がいるんだよ。作品が壊れちゃったら、その人はどう思うかな」と問いかける。物に優しく丁寧にさわる経験は、者との対話にリンクする。「ユニバーサル・ミュージアム」という民博発のコンセプトを回遊する触発の連鎖が、全国に広がることを願っている。

さわる意味の普遍性

「さわるマナー」の普及について、民博でおこなわれている取り組みとして、視覚障害者案内がある。二〇〇六年の企画展「さわる文字、さわる世界」がきっかけとなり、民博では「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」の協力の下、視覚障害のある来館者の展示場体験をサポートしている。盲学校の遠足・修学旅行をはじめ、全国各地の団体・個人から依頼が寄せられる。案内活動では、まずMMPメンバーが各展示場から触学・触楽に適した資料を選び、館内教員のチェックを受けて、プログラムを立案する。企画課の事務職員、複数の研究部スタッフとの協働によって練り上げられる案内プログラムはクオリティが高く、民博独自の来館者サービスとして評価できる。

視覚障害者案内は、社会的弱者に対する支援ではない。じつは、触察をベースとする視覚障害者たちへの展示案内は、優しく丁寧に物・者にさわる実践なのである。たしかに、目が見える・見えないによって、さわり方、さわる意味は異なる。だが、視覚障害者が展示物に接する作法・技法が「さわるマナー」を育むヒントになるのは間違いない。コロナ禍で中断していた視覚障害者案内も、徐々に数が増えている。MMPメンバーとともに、引き続き「さわる展示」のユニバーサルな意義を館内外に発信していこう。

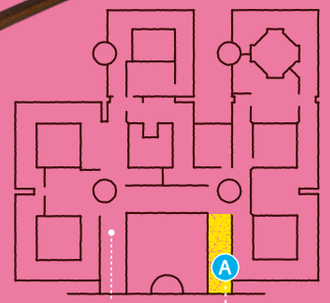
カヌー（H0004975）に触れて航海気分を味わう
（撮影：生田尚子、オセアニア展示場、2021年）

「ユニバーサル・ミュージアム」展示作品
高見直宏作《叢雲――エクトプラズムの群像》2021年

Ⓐ じっくりさわる
内山春雄作
《タッチカービング（トキ）》2009年
（日本、H0267806）

Ⓐ 見てさわる
投槍器
（オーストラリア、L0000449）

Ⓐ 見ないでさわる
砧（きぬた）（つやだしたたき棒）
（セネガル、L0000395）



探究ひろば
「世界をさわる」

2023年4～5月に開催された「ユニバーサル・ミュージアム」岡山巡回展の会場風景
（撮影：桑田知明、岡山市、2023年）

MMPによる視覚障害者案内（東南アジア展示場、2023年）

H・Lからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

INFORMATION みんぱく インフォメーション

イベント予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内

https://www.minpaku.ac.jp/event

各イベントについて、
詳しくは本館ホームページをご覧ください。

特別展

「交感する神と人 ――ヒンドゥー神像の世界」

さまざまなモノに現れるヒンドゥー教の神がみの姿や五感を通じて神像に働きかける人びとの営みを紹介し、神との交感を核とする信仰の世界に迫ります。

会期　9月14日(木)～12月5日(火)
会場　特別展示館

バール・ゴーパール（幼子クリシュナ）（撮影：増田大輔、撮影協力：株式会社エスパ）

◆関連イベント

研究公演
「バジャン ――神々に捧げる信愛の詩（うた）」

日時　9月23日(土・祝)13時30分～15時50分(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員400名)
出演　ミーター・バンディット(北インド古典音楽声楽家、Soma iya大学 教員)
林怜王(タブラー奏者)
ナカガワユウジ(サーランギー奏者)
参加費　要展示観覧券(イベント参加費は不要)
解説　田中多佳子(京都教育大学 教授)
司会　三尾稔(本館 教授)
虫賀幹華(京都大学白眉センター 特定助教)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。

【申込期間】
■友の会先行受付
8月10日(木)～18日(金)
定員80名
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付
8月21日(土)～9月15日(金)

ワークショップ
「ヒンドゥー教の讃歌『バジャン』を歌ってみよう」

日時　9月24日(日)14時～15時30分(13時30分開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員30名)
講師　三尾稔(本館 教授)
ミーター・バンディット(北インド古典音楽声楽家、Soma iya大学 教員)
虫賀幹華(京都大学白眉センター 特定助教)
林怜王(タブラー奏者)
対象　高校生以上
参加費　無料
※事前申込制(8月30日(水)10時～定員に達し次第受付終了)

ワークショップ
「インドの日常の祈りを描く」

日時　10月9日(月・祝)13時～16時15分(12時30分開場)
会場　特別展示館地下休憩所(BF)(定員15名)
講師　三尾稔(本館 教授)
永田郁(宗城大学 教授)
安森大樹(ルーテル学院高等学校 非常勤講師)
対象　小学3年生以上
参加費　500円
持ち物　タオル
※汚れてもよい服装でご参加ください。
※事前申込制(9月6日(水)10時～定員に達し次第受付終了)

企画展

「カナダ北西海岸先住民のアート――スクリーン版画の世界」

北アメリカ北西海岸先住民は、1960年代から神話や口頭伝承などをモチーフとして版画制作を始めました。ユニークな作品とそれらの意味を紹介します。

会期　9月7日(木)～12月12日(火)
会場　本館企画展示場

ハイダ人の住宅の壁面(撮影:岸上伸啓、ブリティッシュコロンビア州オールド・マセット、2006年)

コレクション展示

「ハンターのみた地球」

会期　8月8日(火)まで
会場　本館企画展示場の一部

カラハリ砂漠の弓矢ハンター
(撮影:池谷和信、ボツワナ、2003年)

みんぱく映画会

みんぱくワールド・シネマ
「最後の渡り鳥たち」

トルコ南部の都市メルスィンとその郊外を舞台に、遊牧と定住のはざまで揺れるアナトリアの遊牧民ユルックの姿を、職業俳優を使いながらもきわめてドキュメンタリーに近いかたちで撮影した作品。

日時　9月30日(土)13時30分～16時(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
上映作品「The Last Birds of Passage / Turna Misali」(2021年)
参加費　要展示観覧券(イベント参加費は不要)
解説　松原正毅(本館 名誉教授)
司会　菅瀬晶子(本館 准教授)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
■友の会先行受付
8月21日(月)～25日(金)
定員80名
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
■一般受付
8月28日(月)～9月22日(金)

みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ

「点字体験ワークショップ」

日時　8月12日(土)、9月9日(土)12時～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、随時受付

ビデオテーク新番組

本館2階インフォメーション・ゾーン(無料)のビデオテークブースとみんぱくシアターにて公開中。

番組番号	6061
タイトル	奄美大島の踊りと歌と祭り
監修	笹原亮二、福岡正太、寺村裕史、久万田晋(沖縄県立芸術大学芸術文化研究所)

訃報　君島久子名誉教授

本館の君島久子名誉教授(98歳)がさる6月8日に逝去されました。中国民間伝承がご専門で、本館には1975年に教授として着任され、1989年に定年退官されました。君島先生は、中国・東南アジア諸民族の現地調査をおこない、「民間伝承の比較研究」に関する共同研究を主催し、日本と中国の学術交流を促進されました。著書『中国の神話――天地を分けた巨人』(筑摩書房)では産経児童出版文化賞を受賞されました。『西遊記』(上)(下)(福音館書店)では日本翻訳文化賞を受賞されるなど、中国民話・童話翻訳の第一人者でもありました。定年退官後、聖徳学園岐阜教育大学(現岐阜聖徳学園大学教育学部)に1999年まで在職されていました。謹んでお悔やみ申し上げます。

みんぱくゼミナール

会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第536回
8月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
死してなお「生きる」者
――現代イランにおける戦後と殉教者
講師　黒田賢治(本館 助教)

【申込期間】
■一般受付　8月16日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第537回
9月16日(土)13時30分～15時(13時開場)
ベトナムの黒タイの神話
講師　樫永真佐夫(本館 教授)
ベトナム西北部に広く居住するタイ系民族、黒タイの神話をご紹介しながら、たくさんの民族が雑居する地域における人びとのくらしについて、歴史を踏まえたお話をします。

黒タイの「カメの甲」型の家(2011年)

【申込期間】
■友の会先行予約
8月10日(木)～18日(金)(定員80名)
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付　8月21日(月)～9月13日(水)

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

会場　本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(イベント参加費は不要)

8月27日(日)14時30分～15時
セネガルの食事
――輸入穀物と伝統穀物に注目して
話者　三島禎子(本館 准教授)

9月10日(日)14時30分～15時15分
カナダ北西海岸先住民のスクリーン版画の世界
話者　岸上伸啓(本館 教授)

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話　06-6878-8560(9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

友の会講演会

参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第539回　8月5日(土)13時30分～15時
【コレクション展示「ハンターのみた地球」関連】
人類の原点はハンターにあり！
話者　関野吉晴(探検家)
池谷和信(本館 教授)
※オンライン配信はありません。

第540回　9月2日(土)13時30分～15時
パプアニューギニアの貝と石のお金の話
講師　門馬一平(本館 特任助教)
珊瑚礁に囲まれた南洋の小さな島々。貝や石のお金を求めてカヌーで航海する人びとが住んでいます。隔絶された環境で、島と島は、人と人は、どうやって繋がっているのでしょうか。彼らの交易を丹念にみつめると、資本主義とは違うもうひとつの経済、贈り物の世界がみえてきました。テレビディレクターから転身した人類学者が最新の写真と映像を交えてお話しします。

東京講演会

友の会会員：無料、一般：500円
※事前申込制、先着順(定員50名)
※オンライン配信はありません。

第135回　9月17日(日)13時30分～15時
【特別展「交感する神と人――ヒンドゥー神像の世界」関連】
神になる人びと
――南インド・ケーララ州のテイヤム祭祀
講師　竹村嘉晃(平安女学院大学 准教授)
会場　モンベル渋谷店5階サロン
南インド・ケーララ州北部のヒンドゥー世界では、不可触民男性の身体を介して村人の前に顕現する神霊(テイヤム)を祀った祭儀が盛んにおこなわれています。本講演では、祭儀空間で神霊と交感する村人の様子にふれながら、カーストの伝統的職業として神霊の役割を世襲的に受け継いできた「不可触民」たちの今日の姿を紹介します。

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）
電話　06-6877-8893(9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

○○してみました世界のフィールド

双子のクレーンが見下ろす町

酒井（さかい） 朋子（ともこ）
京都大学 准教授

市の中心部からも双子のクレーン、サムソン（奥）とゴリアテ（手前）が見える（2009年）

タイタニック号を生んだ港

北アイルランドの都市ベルファストの中心部から東に少し行ったところには港湾エリアが広がる。その近辺を歩くと、まず目に入るのは二台の巨大なクレーンだ。黄色い構造物のてっぺんに「H＆W」の黒いゴシック文字。一八六一年創業の造船所ハーランド・アンド・ウルフのランドマークである。最盛期には三万人以上を雇用していたが、一九五〇年代以降は日本を含む世界との競争に敗れイギリス造船業全体が衰退するにともない、経営規模を縮小した。二〇二〇年にロンドンの企業の子会社となり、現在の従業員は一〇〇名あまりという。

今のベルファスト港は、造船業というより観光業の目玉である。じつはここでは、あの豪華客船タイタニック号が建造されている。その悲劇的沈没から一〇〇年にあたる二〇一二年には、大規模博物館タイタニック・ベルファストがオープンした。

双子のガントリー・クレーンは一九六〇年代後半から七〇年代前半に建てられたもので、「ゴリアテ」「サムソン」と名づけられている。旧約聖書に登場する巨人と怪力のもち主の名前だ。高さ一〇〇メートル前後にもなるふたつのクレーンは、東ベルファストに広がる労働者居住区のどこからでもよく見える。抜けるような青空でも、灰色の曇天でも、黄色いふたつの四角形はいつも空の一部だ。

わたしが長く調査をしてきた居住区も港のそばにある。三方向をプロテスタント居住区に囲まれた「飛び地」のカトリック居住区だ。二〇一三年の調査のとき、住民の高齢男性と地域を歩いていてサムソンとゴリアテの話になった。ここからもよく見えますね、とわたしは言った。彼は「本当にな」と言った。そして、自分のおじは造船所で働いていて同僚数名に海に突き落とされたことがあるらしい、と続けた。「あそこで働くのはカトリックにとっては命がけだったさ」。ハーランド・アンド・ウルフが長くプロテスタントを優遇する企業だったというのは、わたしも読んだことがあった。カトリックなのに造船所の仕事につけたのはめずらしかったと思うが、幸運だったかはわからんね、と男性は言う。彼の居住区では二〇世紀をとおして失業が深刻な問題だった。目と鼻の先にある巨大な職場は自分たちには禁じられている。その「閉ざされた機会」の象徴を毎日外に出るたび目にしながら、この居住区の人びとは生きてきたのだ。

モダンな巨大建築のタイタニック・ベルファスト（2013年）

暴力と、分断と、共有の風景と

イギリス連合王国領の北アイルランドでは、プロテスタントのイギリス系住民とカトリックのアイルランド系住民のあいだに根深い分断がある。先にふれた居住区は、一九六九～一九九八年の紛争で激しい住民衝突、ゲリラ戦、治安当局による弾圧を経験した。一九七五年には、地元民でごった返すパブに爆弾が投げ入れられたこともあった。六人が亡くなり、五〇名が重軽傷を負った。

そのパブは、すぐ近くに場所を変えて今も営業を続けている。二〇一〇年代には元のパブの姿が外壁に描かれていた。ブルーと白の壁、窓ガラスに貼られたお酒のポスター、屋根の向こうにそびえる黄色いクレーン。建物からすぐ横の空に視線を流せばクレーンの本物が目に入る。気の利いた構図だった。少し前に消されてしまったようだが。

サムソンとゴリアテを描いた壁画は周辺のプロテスタント居住区でも多く目にした。もともとベルファストでは歴史や政治を題材にした壁画が市街地に多く描かれ、風景の一部となっている。近年は和解を題材にした壁画も多く登場し、「共有の風景」ということなのかクレーンも描き込まれるようになった。カトリック居住区から大通りをはさんで向かいには、青い服を着た少年と緑の服を着た少女が握手する壁画があらわれた。分断を抱えるふたつのコミュニティを象徴すると思われる二人のあいだにはクレーン。地元のコミュニティ・ワーカーが詠んだ詩もしるされている。「もう墓前には立ちたくない」「停（と）まっているだけの車にもうおびえたくない」「No more」「No more」。

平和を祈念するこの壁画のなかで、暴力と差別の歴史をも象徴するサムソンとゴリアテをいかに読むべきだろうか。双子の黄色いランドマークがベルファストの風景として印象に残るのは、その一筋縄ではいかないアイロニーのためである。

左の少年は詩"No More"の作者の孫がモデルという。アイルランド系らしき少女と握手する（2012年）

1975年に爆弾が投げ込まれたパブの移転先。壁には移転前の姿が描かれている（2012年）

港町の壁画をめぐってみました

コレクション
あれこれ

大阪万博アメリカ館のティピーの行方

伊藤 敦規（いとう あつのり）　民博 准教授

「クロウ・バッファロー・ティピー」。直径4メートル、高さ6メートル、キャンバス地
（大阪府吹田市、1970年）National Archives photo no. 306-exn-3378-28
※所在をご存じの方は月刊みんぱく編集室までお知らせください。

EEM（日本万国博覧会世界民族資料調査収集団）コレクション

点数：約2,500点
70年大阪万博のためにEEM（日本万国博覧会世界民族資料調査収集団）が世界各地で収集した神像や仮面、生活用具。現在、民博に収蔵されている。

一九七〇年の大阪万博（日本万国博覧会）会期中に、EEM（日本万国博覧会世界民族資料調査収集団）が収集した神像や仮面を太陽の塔内部で展示したことはよく知られているが、民族誌資料は各国・各州のパビリオンでも展示されていた。例えばニュージーランド館ではキウイの羽根で作られたチーフ用の大きな外套（がいとう）（マオリ製）が飾られていたし、カナダ館では四名のイヌイットの彫刻家と版画家が半年間日本に滞在して制作実演をした。

アメリカ館のクロウ・バッファロー・ティピー

アメリカ館は来館者数でソ連館、カナダ館に続く第三位の人気で、集客理由のひとつは「月の石」だった。パビリオン自体は空気で屋根を支える楕円形（だえんけい）のドームで支柱は一本もない。特集記事「アメリカ館のすべて」を掲載した講談社『週刊少年マガジン』第一二巻第三六号によると、その白い巨大なテントの内側の展示会場は上下二層。下層の一角に、米国南西部先住民製の土器、銀細工、仮面、織物や、カリフォルニア先住民製と思われる籠細工約一〇〇点を展示するコーナーが設けられている。特に目立つのが直径四メートルのテントである。テント状のパビリオンの内部に建てられた先住民製のテントの標題は「クロウ・バッファロー・ティピー」、作者は大平原先住民ブラックフィートのダロー・ブラックマンだった。

上：アメリカ館鳥瞰
（大阪府吹田市、1970年）National Archives photo no. 306-exn-48-24
下：70年大阪万博でのアメリカ館内の「クロウ・バッファロー・ティピー」展示風景
（大阪府吹田市、1970年）National Archives photo no. 306-exn-3315-9

大阪市長に贈呈。その後は？

民族誌資料は収集者側の都合で無銘とされがちだが、このティピーは作者も来歴もはっきりしている。アメリカ館の先住民関連展示の企画者は米国内務省インディアン美術工芸委員会で、米国広報文化交流局が一九六九年にブラックマンに制作を依頼し、彼は地元モンタナ州ブロウニングの大平原先住民博物館にて完成させた。万博閉会から一カ月が経った一〇月一二日、大阪市庁舎ホールで再び建立され、翌一三日には贈呈式が開催された。ハワード・チャーノフ米国万博代表から中馬馨（ちゅうま かおる）大阪市長に贈られたティピーは、米国には戻らず日本に留まることになったのである。

それから五〇余年。筆者は、デラウェア大学で米国先住民美術史を専攻しているジェシカ・ホートン准教授から連絡を受けた。このティピーの所在を調べていて、大阪市に照会したものの、「所蔵なし」という返事があり困っていた。そこで、彼女から提供された情報を手がかりに、筆者が大阪の複数の機関に問い合わせた。

大阪市庁舎での贈呈式後に展示予定のあった大阪市立自然史博物館からは、「まったく聞いたことがない。民俗資料なので歴博にいったと考える方が自然に思う」という回答を得た。大阪歴史博物館では前身の大阪市立博物館時代の資料リストも調べていただいたが「該当なし」だった。同じく贈呈式後に展示予定があった天王寺動物園からも「該当する記録も職員の記憶もない」という回答が寄せられた。念のため動物園に隣接する大阪市立美術館と現在多くのEEM資料を所蔵する民博の標本資料係にも連絡したが、どちらも記録・所蔵なしだった。

「未登録資料」という希望

「クロウ・バッファロー・ティピー」は一体どこへいったのか。贈呈式後に廃棄されたのかも知れないが、私は将来偶然巡り会える希望を捨てていない。というのも、博物館収蔵庫内では「未登録資料」に出会う機会が少なからずあるからだ。

一般的に、博物館に資料が辿（たど）り着くまでの行程は、①作り手→現所有者、②作り手→前所有者→現所有者の二通りがある。現所有者である博物館に到着した段階で必ず資料登録される。登録を経ないものは収蔵庫には入れないのが原則だ。ここでいう「未登録資料」とは、作り手、もしくは、前所有者から現所有者に所有権が移った後に資料登録を待つ状態のものではない。収蔵庫内で発見された所有権の帰属すらわからないものの、わたしたちの業界では「Found in collection（FIC）」とよばれる。FICが生じる要因はいくつか考えられる。例えば登録漏れという作業上の単純ミスもあれば、資料調査にやって来た人が持ち込んだ私物の置き忘れや、未返却の他機関借用資料の場合もある。

筆者はこのティピーが廃棄されたのではなく、畳まれた状態でFICとして今もどこかの収蔵庫で眠っていると信じたい。そして、ホートン准教授と同じように、いつの日か制作者やその遺族をはじめとするソースコミュニティの人びととの再接続を実現させたいと思っている。

70年大阪万博でのアメリカ館内の展示風景
（大阪府吹田市、1970年）
National Archives photo no. 306-exn-3398-27

シネ倶楽部M

大統領はコメディアン

赤尾光春（あかお みつはる）
民博 特任助教

「私は全生涯をかけてウクライナ人を笑わせるために全力を尽くしてきました。……今後は、少なくともウクライナ人がこれ以上泣くことがないように全力を尽くします」

二〇一九年に現職のポロシェンコを大差で破り、第六代ウクライナ大統領に選出されたヴォロディミル・ゼレンスキーは、就任演説で開口一番にこう述べた。このことばどおり、彼のキャリアはコメディアンとしての経歴の延長線上に築かれたものだった。ウクライナのみならず、旧ソ連諸国でも人気だったゼレンスキーの名を不動のものにしたのが、テレビシリーズ「国民の僕（しもべ）」である（「国民の僕2」は二〇一六年に映画化もされた）。

汚職と闘う元高校教師

「国民の僕」は、誠実さだけが取り柄のしがない高校教師ワシーリー・ゴロボロヂコが、ウクライナの汚職文化を糾弾する様子を生徒が撮影した動画が拡散されたのをきっかけに、大統領になるという奇想天外な物語である。政界の黒幕である新興財閥オリガルヒ三人衆との対決を軸に、素人大統領がウクライナの政治を刷新するまでを描いたこのドラマがメスを入れるのは、議会制民主主義の機能不全という問題に留まらない。数々の滑稽なエピソードを通じて、主人公たちの身内も含めて社会の末端にまで巣食う汚職のメカニズムが白日の下に晒（さらし）される。同時に、難局を乗り越え、政治家として成長を遂げてゆくゴロボロヂコらの姿を通じて、社会変革は可能なのだというメッセージも織り込まれている。

歴史との対話をとおした教養ドラマ

主人公が歴史教師であるのもポイントのひとつだ。ゴロボロヂコは白昼夢のなかで、プルタルコス、シーザー、ルイ一六世、リンカーン、チェ・ゲバラなどのほか、ウクライナの歴史上の人物たちと対話を重ねる。彼らは助言役ないしは反面教師として教訓と霊感を与え、岐路に立つゴロボロヂコの迷いを解いてゆく。かくして、「素人政治はいかにして可能か」という命題を追究した「国民の僕」は、「ウクライナ人とは誰か」、「ウクライナはどこから来てどこへ向かうのか」という国民的アイデンティティにも再考を迫る、優れた教養ドラマになっている。

現実化する虚構

「国民の僕」で素人大統領を待ち受ける数々の難題を徹底的にシミュレーションした後、ゼレンスキーと彼の芸能プロダクション「95街区（クヴァルタル95）」は、この作品と同名の政党「国民の僕」を立ち上げ、現実の大統領選に打って出た（シーズン3は大統領選の最中に放映された）。選挙戦では、討論への参加やジャーナリストの質問を巧みに避けながら、ドラマと親和性の高い動画を発信する型破りな戦術を採り、腐敗政治に辟易（へきえき）していた国民の心を摑（つか）んで地滑り的勝利を収めた。現実と虚構の区別がつかなくなった有権者は、ゼレンスキーその人というより、愛すべき「国民の僕」ゴロボロヂコに投票したのだといっていいだろう。

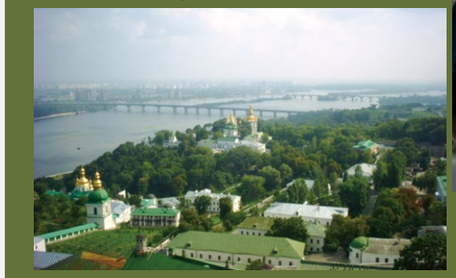
「プーチン・ジョーク」とタブー化されたロシアの脅威

全編ロシア語の「国民の僕」は、親ロシア派のヤヌコヴィチ政権を転覆させたマイダン革命後に生じたロシアとの紛争の最中に制作され、放映された。騒然とした議場を鎮めるために「プーチンが失脚したぞ！」と叫ぶシーンや、「プーチンは間抜け（フロ）」というおなじみのフレーズを捩（もじ）った「プーチン（の腕時計）はウブロ」というセリフ（ロシア国内での放映時にはカットされた）など、ロシア大統領を揶揄（やゆ）する場面もある。だが、これらは本筋とは無関係のジョークの類であり、本編でロシアの問題が本格的にとりあげられることはない。

唯一の例外は、主人公が白昼夢のなかでイワン雷帝と対話するシーンである。「ポーランド人とリトアニア人の支配からお前たちを解放してやろう」と言うイワン雷帝に、ゴロボロヂコは「結構です、我々はヨーロッパに行きますから」と無碍（むげ）に答える。「同じ血をわけたスラヴの兄弟ではないか」と訴える相手に、彼はきっぱりと言う。「我々は別々の方向に行って、三〇〇年後にまた話し合いましょう」。そこで押し問答になった挙げ句、イワン雷帝は錫杖（しゃくじょう）でゴロボロヂコを殴って殺してしまう。

ロシアによる突然のウクライナ侵攻は、この白昼夢が正夢になったかのようだ。プーチン大統領を意識して「笑いは大理石の男にとって致命的な武器なのです」とかつて語ったことのあるゼレンスキーは、今や侵略者を迎え撃つ総司令官の役目を担っている。人相も人格もまるで別人のようだが、カーキ色の軍服の下では、コメディアン魂が今も脈打っているはずである。

2020年の地方選挙における「国民の僕」党の選挙広告。「ウクライナ――それはあなた！」（キーウ、2020年）出典：Wikimedia Commons/ Tohaomg, CC BY-SA 4.0


ドニプロ川を臨むキーウのペチェールシク大修道院（キーウ、2000年）

2019年7月のウクライナ議会選挙で投票するゼレンスキー大統領。左は妻のオレーナ・ゼレンスカ氏（キーウ、2019年）
出典：Wikimedia Commons/ The Presidential Office of Ukraine, CC BY 4.0

「国民の僕」

原題：Слуга Народу
2015～2019年／ウクライナ／ロシア語（一部ウクライナ語）／Netflixで全編視聴可
監督：ヴォロディミル・ゼレンスキー、アンドリィ・ヤコヴレフ、ボリス・シェフィル、オレクシィ・キリュシェンコ
出演：ヴォロディミル・ゼレンスキー、スタニスラフ・ボクラン、イェヴヘン・コショヴィ、オレーナ・クラヴェッツほか

ゼレンスキー率いる95街区の人気コント番組「夜の街角」の一場面。「国民の僕」のシナリオはこのメンバーによる共作であり、彼らはゼレンスキーが演じる主人公ゴロボロヂコを支える閣僚役などを演じた（キーウ、95街区スタジオ、2018年）
出典：Wikimedia Commons/ Vadim Chuprina, CC BY-SA 4.0

ことばの迷い道

ドマリ語、教えようか？

北村 萌（きたむら もえ）
日本学術振興会 特別研究員DC1

「彼はシャイだから」。エルサレムにあるドム人のためのNPO団体のセンターで、センター長が肩をすくめて言った。その朝、ドマリ語の話者の方を紹介してもらい、しばらくセンターに通ってドマリ語の記録に取り組むことになっていた。気が進まなくなってしまったのだろうか、わたしのドマリ語の先生になる人は、なかなかセンターに入ろうとせず、外に置いてあったほうきを持って、建物の周りをうろうろしていた。やせた頬（ほお）、焼けた肌、白い髪とひげ。60代、といっても日本人の同世代より老いた印象だ。彼は2時間、センターの周囲を掃除した。その後、センターのスタッフらを交えて昼食をとり、コーヒーを飲んで、やっと「ドマリ語を教えてくれますか？」と話しかけることができた。表情は硬かったが、「いいよ」と返事が返ってきた。

わたしが研究しているドマリ語は、消滅危機言語のひとつだ。話者は、ヨルダン、パレスチナ、シリア、レバノンなどの中東地域に散住するドム人で、放浪の歴史をもついわゆるジプシーとよばれる民族に含まれる。ドム人たちは、周囲のアラブ人社会において差別されてきた歴史がある。このような背景をもつ言語は、威信（社会的な評価の高さの程度）が低いと言われる。話者たちはコミュニティに受け継がれてきた継承語を隠し、手離し、権威のある周囲の言語に同化しようとする。話者数は次第に減少し、威信の高い言語へのシフトが生じる。ドマリ語の場合、移行先の言語はアラビア語だ。1200〜1500人程度いると言われているエルサレムのドム人は、ほんの数人のお年寄りを除くほとんどがもうアラビア語しか話すことができないし、ドマリ語を学ぼうとする若者もいない。先生の消極的な態度も、このような背景を考慮すると頷ける。

だが、先生のドマリ語への態度は、わたしにレッスンを重ねるうちに、みるみる変わっていった。ドマリ語を話すとわたしが異常に喜ぶことに気づいたからだろうか。わたしが落ち込んでいるときには、慌てた様子で、「ˋallimōšī dōm?（ドマリ語、教えようか？）」「nkīri aṭwal dars ajoti!（今日は特別に長いレッスンをしよう！）」と元気づけてくれ、新型コロナウイルス感染拡大の波がエルサレムにまで及び始めたときには、「コロナにかかっても俺はドマリ語のレッスンをやめない」とまで言ってくれた（さすがにそんなことになっては大変なので調査はしばらく休止にした）。外国人の訪問客がセンターを訪れた際には、頼まれてもいないのにドマリ語のレッスンを始め、訪問客を困らせる姿も見かけた。わたしが別のドマリ語話者に調査を試みた際には、自分の方がドマリ語がうまいと喧嘩（けんか）を売りにいったこともある。これには困った。が、先生がドマリ語に対する誇りを取り戻したようで、そんな姿を見るたびにじんわり嬉（うれ）しい気持ちになった。

たとえ威信の低い言語であっても、自分たちにしか話せない言語があることは、本来、話者にとって誇らしいことであるはずだ。「ˋallimōšī dōm?（ドマリ語、教えようか？）」と得意げな先生の笑顔が忘れられない。

『月刊みんぱく』は
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日9：00〜17：00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく　2023年8月号

第47巻第8号通巻第551号　2023年8月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　樫永真佐夫（編集長）　河西瑛里子
黒田賢治　島村一平　中川理　松本雄一
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC® C013678　VEGETABLE OIL INK　GREEN PRINTING JFPI P-810282

月刊みんぱく

2023年
8月号

編 集 後 記

四角い格子の向こうに、堅牢（けんろう）に閉じ込められた生活風景が透けて見えている。今月号はそんなイメージの表紙デザインで、強い管理下で人びとが感じている息苦しさを、デザイナーさんが見事に表現してくれた。

そういえば子どものころ、鉄格子の扉などを見つけると、向こう側に行って両手で格子を握って揺さぶり、「俺は無実だ〜！」と叫んで笑いをとろうとする子が、どこにでもいたものだ（関西だけ？）。テレビやアニメの影響にちがいないが、管理社会ということばもすでによく耳にしていたから、当時の子どもも感じていた、目に見えない格子のなかにいるような閉塞感の表現だったのかもしれない。それから40年は経ち、皆とっくに社会と正義に馴化（じゅんか）された大人になり、「丸く」なっていることだろう。

それにしても、不思議なことがあるものだ。大阪万博でアメリカ館に展示されていた、6メートルもの巨大テント「ティピー」が迷子のままだなんて。また、まるで自身が主演したドラマの再現みたいにコメディアンが一国の大統領に就任し、国際的に存在感を高めているだなんて。世界は、まだまだ驚きに満ちている。

世界の驚きを探すなら、みんぱく！　無料ゾーンの利用だけでも十分涼みながらお楽しみいただけますよ。
（樫永真佐夫）

次号の予告 9月号

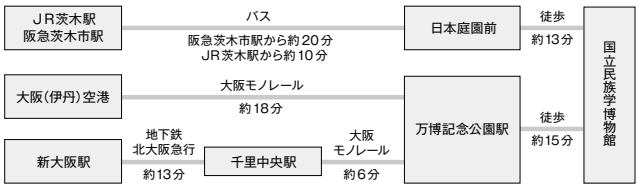
特集「神さま絵の今昔」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日が休館日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

国立民族学博物館友の会機関誌

『季刊民族学』185号　ISBN 978-4-915606-87-8

［特集］ビーズ大陸 アフリカ

人類発祥の地であるアフリカは、人類最古のビーズが生まれた地域として知られています。ビーズは美意識やアイデンティティの象徴であるとともに、交易品としてさまざまな地域を結びつけました。アフリカ社会とビーズとのかかわりを紹介します。

ビーズからみた新たなアフリカ文化史
池谷 和信

ビーズからみたナイル川流域世界
遠藤 仁

発掘が物語るアフリカのビーズ
竹沢 尚一郎

スタンリのビーズ
鈴木 英明

サンブルの恋愛とビース装飾
中村 香子

ビーズ細工を仕事にする
緒方 しらべ

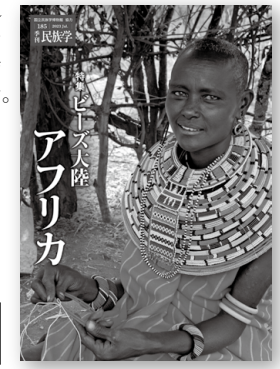
ナミビアのヒンバの儀礼とビーズ
宮本 佳和

出稼ぎするアーティストたち
北窓 恵利香

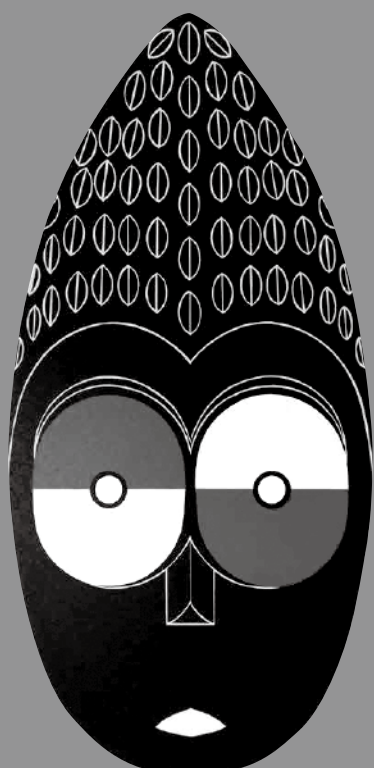
世界に発信するアフリカンビーズ
池谷 和信

ビーズ展、日本列島を駆けめぐる
池谷 和信

国立民族学博物館ミュージアム・ショップにて販売中
友の会会員価格　2,000円+税　一般価格　2,500円+税



みんぱくと歩んだ版画家の創作世界



田主誠 版画展

たぬし まこと

ミュージアム・オブ・ドリームス

Museum of Dreams

今春、亡くなった版画家・田主誠（1942-2023）は、国立民族学博物館(みんぱく）の開館当初から広報誌『月刊みんぱく』や研究連絡誌『民博通信』の挿画をはじめ、新聞や雑誌の仕事を数多く手掛けました。みんぱくをこよなく愛し、みんぱくから広がった体験や交流を心と表現の糧とした版画家の創作世界の一端をお楽しみください。

2023年 9月7日［木］～11月28日［火］

【第1期】9月7日［木］～10月3日［火］　民話の世界／民族博物誌／民博百景 など
【第2期】10月5日［木］～31日［火］　心をひろう旅／いい日本みつけた など
【第3期】11月2日［木］～28日［火］　心の旅 西国三十三所／山頭火の風景 など
【通　期】仮面の世界／装丁・装画の仕事 など

10:00～17:00（入館は16:30まで）水曜日休館　観覧無料

期間中、ミュージアムショップで関連作品、書籍、グッズ等販売いたします。
本館展示、特別展は別途観覧料が必要です。

会場：**国立民族学博物館**　本館1階エントランスホール

主催：公益財団法人 千里文化財団　協力：国立民族学博物館、編集工房is
後援：茨木市、舞鶴市、NHK大阪放送局、京都新聞、産経新聞社、毎日新聞社、読売新聞社